

令和3年度 卒業論文

若者の「ニセ方言」使用の実態

広島大学文学部人文学科
日本中国文学語学コース 日本文学語学専攻 4年
B182366 角井勇斗

目次

1. はじめに
2. 関連研究
3. 調査方法
4. 調査結果
 - 4.1 アンケート調査
 - 4.1.1 「ニセ方言」の相手別・場面別使用率
 - 4.1.2 「ニセ方言」を使用する理由
 - 4.1.3 「ニセ方言」を使用しない理由
 - 4.1.4 補足項目
 - 4.2 個人インタビューについて
 - 4.2.1 友人Tについて
 - 4.2.2 友人Uについて
5. 検討・考察
 - 5.1 「ニセ方言」が使われる場面
 - 5.2 「ニセ方言」の効果
6. おわりに

1. はじめに

今日、若者はメディアや学校、SNSなどで様々な地域の方言と触れる機会がある。そのため、自分の生育地以外の方言を使用したことがある人もいるだろう。例えば、友人が普段使っている方言を友人の前で少し真似てみる、関西弁や博多弁などの知名度の高い方言を使うということが当てはまる。田中ゆかり（2007）は、そのような非生育地方言のことを「ニセ方言」と名付けている。

さて、本卒業論文への第1の動機としては、筆者自身のニセ方言の使用実態に基づくものである。広島で生まれ育ち、高校までは広島弁（生育地方言）のみを話してきたのだが、大学進学以後、友人が使う関西弁や静岡の方言を会話に用いるようになったことがある。このことを省みると、意識的にニセ方言を使用する場面もあれば、無意識に使用していると見られる場面もあることに気が付いた。

従来、方言についての研究は、土地に結びついた地域方言が中心であり、また「ニセ方言」についての研究は、首都圏を対象としたものが多く、「方言主流社会」と言われる地方における「ニセ方言」使用についての論は少ないのが現状である。そこで本稿では、地方の若者の「ニセ方言」使用の実態を調査し、調査結果を基に若者のコミュニケーションにおける「ニセ方言」の位置づけについて考察をする。

なお、方言の定義については、人により考え方が異なってくる場合がある。本稿では、大西（2008）が方言を「特定の言語の中に存在するバリエーションであり、かつ、特定の地域の言語の総体を意味している。」と定義していることを参考に、方言を「その特定の地域で使われる日本語の変種」と定義をして考えていく。

2. 関連研究

まず、方言の価値についての考え方について整理したい。

現代では、方言の価値が上がっていると言われている。小林隆（2004）によれば、方言は「近代の方言」と「現代の方言」に分けて考えることができるとしている。近代における日本では、方言を「恥ずかしいもの」「好ましくないもの」として扱う風潮が見られ、「方言コンプレックス」（柴田武 1958）とも呼ばれた。これは、「標準語教育」や「方言矯正」の推奨という国家の方針の影響を受けて生まれたものである。一方、現代の方言に関しては、方言の保護・普及活動が行われるなど、その存在価値が認識されている。

また現代は、方言が持つ機能にも注目されており、機能について述べた論も少なくはない。例えば、小林隆（2004）は、現代方言が「システム（言語体系そのもの）」から「スタイル（私的場面で使用される一種の文体）」へと変容していること指摘している。特に若者の方言については、「共通語にちりばめられる心理的要素」として使われているとし、ファッションのように装飾することに見立てて、「方言のアクセサリー化」と名付けている。一方、田中ゆかり（2007）は、「方言を目新しいもの、おもしろいもの、価値あるものとして、そ

れが生育地方言であるか否かを問わず、バリエーションを広げたり、楽しんだりすることを主目的に採用・鑑賞する」という「方言」の受容態度と言語生活における運用態度のことを「方言のおもちゃ化」と呼び、現代は「方言おもちゃ化」の時代を迎えていると指摘している。

次に、本稿で主に扱う「ニセ方言」であるが、これは既に上に述べたように田中ゆかりによる造語である。田中は「ニセ方言」が、その「方言」に染み付いたステレオタイプをキャラとして臨時的に発動させる効果を持つことがあると明らかにしている。このように「方言」を用いキャラを臨時的に発動させる現象を「方言コスプレ」¹と表現し、以下のよう

「方言コスプレ」は、話し手自身が本来身に着けている生まれ育った土地の「方言」（生育地方言）とは関わりなく、日本語社会で生活する人々の頭の中にあるイメージとしての「〇〇方言」を、その場その場で演出しようとするキャラクター、雰囲気、内容にあわせて臨時的に着脱することを指している。（田中ゆかり 2011 3頁）

以上のように、その場にあったキャラクターを演出するために「ニセ方言」を臨時的に用いることを、コスプレという行為と照らし合わせている。例えば、「つつこみキャラ」を演出するために「関西弁」を、「男キャラ」を演出するために「九州弁」を使うことなどが「方言コスプレ」に当てはまる。現在、「ニセ方言」の機能としては、この「方言コスプレ」という考え方が中心となっている。

これまでの「ニセ方言」に関する調査としては、田中(2007)の調査と三宅(2018)の調査が主に挙げられる。

前者の調査は、首都圏の大学に通う大学生を対象に、「本方言」「ジモ方言」「ニセ方言」²の使用意識について場面別で尋ねたものである。質問で示された場面としては、「相手（家族、地元友人、大学友人）」「メディア（会話、メール、手紙）」を組み合わせた9つであった。その中で「ニセ方言」に関しては、首都圏生育者の方が非首都圏生育者よりも使用率が高いこと、相手では「大学友人」、場面では「会話」での使用率が高いことが明らかになっている。しかし、場面別・相手別に使用率が異なっている理由については、考察がされていなかった。また、「ニセ方言」を使用する理由も調査しており、「おもしろい感じを出せるから」「親しい感じを出せるから」といった回答が目立っていた。

三宅(2018)年の調査は、首都圏の大学に通う大学生を対象として、「エセ方言」の使用意識や、SNSと対面での使用意識の違いを調査したものである³。結果として、「エセ方言」は親しい人に対して多く使われていること、方言話者に対しては使われにくいこと、SNSの方が「エセ方言」使用率が高いこと、無意識に「エセ方言」を使う人も多く、「エセ方言」の慣用化が進んでいること、などが明らかになっている⁴。三宅の調査では、筆者が注目している無意識な「ニセ方言」の使用について、該当する人が一定数いることが示されていた。

なお、両者の調査とも、首都圏に通う大学生を対象としており、「方言主流社会」である地方の大学ではまた異なった結果が出る可能性もあると予想できる。

最後に、現代では一般的となったコミュニケーションツールにおける方言についても確認しておきたい。現代では、LINE や Twitter を始めとした SNS が一般的となっており、コミュニケーションの手段として多く使用されている。その中でも、方言は「打ちことば」として現れてくる。三宅和子 (2006) は、関東圏の若者の携帯メールにおける方言について調査を行い、「方言を使う相手として、相手が方言話者であるか否かよりも、親しいか否かが最も重要である」ことを明らかにした。三宅は、このことについて「親しさ志向」という言葉を使っている。この「親しさ志向」とは、親しさを確認する志向でもあれば、親しくない間柄を親しさへ引き寄せる志向でもあるとしている。また三宅 (2018) は、大学生の LINE における方言についても調査を行っている。その中で、方言は LINE の中で、絵記号・スタンプなどと同様に「場の関係性の構築・保持・深化に利用されている」と述べ、「話しことばよりも自由で積極的な、新しいコミュニケーション表現の 1 つ」という指摘をしている。

3. 調査方法

本稿においては、調査を 2 種類行った。

1 つ目は、アンケート調査である⁵。インターネット上のアンケート (Google フォームのアンケート機能) を使用した。調査対象は、首都圏の大学以外に通う大学生とし、広島大学に通う学生を中心に、知人に LINE のグループなどで回答を募った。アンケートの設問内容は以下の表 1 の通りである。また、集計にあたって、割合の計算では小数第 2 位を四捨五入したため、合計が 100 にならない時がある。

【表 1 アンケート調査の項目】

カテゴリー (設問数)	設問の内容
フェイス項目 (6)	Q1. 性別、Q2. 年齢、Q3. 故郷、Q4. 故郷居住期間、Q5. 現在の居住地、Q6. 居住地在住期間
家族への使用について (9)	Q7. 会話での使用について、Q8. Q7 の「使う」理由、Q9. Q7 の「使わない」理由、Q10. SNS での使用について、Q11. Q10 の「使う」理由、Q12. Q10 の「使わない」理由、Q13. 手紙での使用について、Q14. Q13 の「使う」理由、Q15. Q13 の「使わない」理由
地元友人への使用について (9)	Q16. 会話での使用について、Q17. Q16 の「使う」理由、Q18. Q16 の「使わない」理由、Q19. SNS での使用について、Q20. Q19 の「使う」理由、Q21. Q19 の「使わない」理由、Q22. 手紙での使用について、Q23. Q22 の「使う」理由、Q24. Q22 の「使わない」理由

大学友人への使用 について（9）	Q25. 会話での使用について、Q26. Q25 の「使う」理由、Q27. Q25 の「使わない」理由、Q28. SNS での使用について、Q29. Q28 の「使う」理由、Q30. Q28 の「使わない」理由、Q31. 手紙での使用について、Q32. Q31 の「使う」理由、Q33. Q31 の「使わない」理由
補足項目（6）	Q34. 会話・SNS・手紙の中で最も使いやすいと感じる場面、Q35. Q34 の理由、Q36. 家族・親しい地元友人・そこまで親しくない地元友人・親しい大学友人・そこまで親しくない大学友人の中で最も使いやすいと思う相手、Q37. Q36 の理由、Q38. 異なる地域出身の友人から、自分の地域の方言が使われると、相手に対してどう思うか、Q39. 調査の中で「SNS」として想定したもの

相手・場面別で「ニセ方言」の使用を尋ねる際は、「よく使う」「たまに使う」「使わない」の3段階で回答をしてもらった。(Q7,10,13,16,19,22,25,28,31)

「ニセ方言」について、相手・場面別での使用を尋ねた際、その理由も一緒に回答してもらった。(Q. 8,9,11,12,14,15,17,18,20,21,23,24,26,27,29,30,32,33)「よく使う」「たまに使う」と答えた方には、「自然と出てしまうため」「相手が使っているため」「その場の雰囲気に合わせてため」「おもしろい感じを出せるため」「親しい感じを出せるため」「分からない」「その他（自由記述）」と、使う理由を尋ねる選択肢を用意した。「使わない」と答えた方には、「相手の気分を害するだろうと思うため」「故郷の方言で話すため」「故郷以外の方言を知らないため」「その方言が正しいものなのか分からないため」「違和感があるため」「何となく嫌だから」「分からない」「その他（自由記述）」と、使わない理由を尋ねる選択肢を用意した。使う理由・使わない理由ともに、複数回答を可能とした。そのため、場面別の回答数の合計は100%とは限らない。

2つ目は、「ニセ方言」をよく使う友人への個別インタビューである。実際に「ニセ方言」を使用している人は、どのような相手・場面で使っているのかをより詳しく調査するため、「ニセ方言」を日頃使うことがある友人2人に個別インタビューを行った。主なインタビュー項目は表2の通りである。項目に沿ってインタビューを行い、それぞれの回答によって深掘りの質問などを追加で投げかけた。また同時に、実際に「ニセ方言」を使っている様子をLINEのメッセージ検索機能を使って探し、その文面や流れ・背景も調査した⁶。

【表2 個別インタビューの項目】

カテゴリー	設問の内容
フェイス項目	Q1. 性別、Q2. 年齢、Q3. 故郷、Q4. 故郷居住期間、Q5. 現在の居住地、Q6. 居住地在住期間
家族に対して	Q7. 話し相手、Q8. 話し相手の属性、Q9. 使用言語、Q10. 使用言語への意識
地元友人に対して	Q11. 話し相手、Q12. 話し相手の属性、Q13. 使用言語、Q14. 使用言語への意識
大学友人に対して	Q15. 話し相手、Q16. 話し相手の属性、Q17. 使用言語、Q18. 使用言語への意識

4. 調査結果

4.1 アンケート調査

有効回答数は、18歳から22歳の男女54件であった。(男性39名、女性15名)
 回答者の出身地は、静岡県から佐賀県まで様々であった。また、現在の居住地は、広島県45名の他に、愛知県1名、京都府1名、兵庫県3名、福岡県4名であった。

4.1.1 「ニセ方言」の相手別・場面別使用率

相手・場面別で「ニセ方言」の使用を尋ねる際、「よく使う」「たまに使う」「使わない」の3段階で回答をしてもらった。

【表3 「ニセ方言」の相手・場面別の使用率】

相手	場面	よく使う(%)	たまに使う(%)	使わない(%)
家族	会話	6(11.1%)	24(44.4%)	24(44.4%)
	SNS	3(5.6%)	16(29.6%)	35(64.8%)
	手紙	0	0	54(100%)
地元友人	会話	8(14.8%)	30(55.6%)	16(29.6%)

	SNS	6(11.1%)	27(50%)	21(38.9%)
	手紙	0	3(5.6%)	51(94.4%)
大学友人	会話	16(29.6%)	32(59.3%)	6(11.1%)
	SNS	15(27.8%)	21(38.9%)	18(33.3%)
	手紙	2(3.7%)	5(9.3%)	47(87%)

家族に対する SNS と全て相手に対する手紙の項目以外では、「よく使う」「たまに使う」を選択した人が「使わない」を選択した人よりも多く、このことから、田中（2007）による首都圏の大学に通う大学生に対する調査での指摘と同様、地方の大学に通う大学生でも「ニセ方言」の使用が認められることが明らかになった。また、「ニセ方言」は「大学友人」「会話」の場面で最もよく使われるということが分かった。また、どの対象においても、手紙において「ニセ方言」が使用されることはほとんどなかった。

4.1.2 「ニセ方言」を使用する理由

各項目（Q7,10,13,16,19,22,25,28,31）において、「よく使う」「たまに使う」を選択した人が、理由としてどのような選択肢を選んだのかをまとめる。

まず、家族に対して「よく使う」「たまに使う」を選択した人は、以下の表4のように選択した。

【表4 家族への「ニセ方言」の使用理由】

回答	場面（選択人数）	会話 (30人)	SNS (19人)	手紙 (0人)
自然と出てしまうため		25	8	0
おもしろい感じを出せるため		9	7	0
その場の雰囲気に合わせてため		10	5	0
相手が使っているため		3	3	0
親しい感じを出せるため		6	3	0
分からない		3	2	0
その他		1	0	0

家族に対して「ニセ方言」を使う人は、「会話」「SNS」の両方とも「自然と出てしまう」ために使用しているという意識が多いことが分かった。また、「方言コスプレ」の現象に当てはまると考えられる回答も一定数見られた。

次に、地元友人に対して「よく使う」「たまに使う」を選択した人は、以下の表5のように選択した。

【表5 地元友人への「ニセ方言」の使用理由】

回答 \ 場面 (選択人数)	会話 (38人)	SNS (33人)	手紙 (3人)
自然と出てしまうため	29	17	1
おもしろい感じを出せるため	11	14	2
その場の雰囲気に合わせてため	12	14	1
相手が使っているため	6	7	1
親しい感じを出せるため	10	8	2
分からない	0	1	0
その他	0	0	0

地元友人に対しての使用理由についても、家族に対しての理由とほぼ同様の回答となった。しかし、手紙で「ニセ方言」を使う人が少数ながら存在し、その回答からは「方言コスプレ」の現象が見られた。書き言葉となる手紙に関しても、「ニセ方言」を用いキャラを着脱することがあるということが分かった。

最後に、大学友人に対して「よく使う」「たまに使う」を選択した人は、以下の表6のように選択した。

【表6 大学友人への「ニセ方言」の使用理由】

回答 \ 場面 (選択人数)	会話 (48人)	SNS (36人)	手紙 (7人)
自然と出てしまうため	32	17	2
おもしろい感じを出せるため	10	15	4
その場の雰囲気に合わせてため	19	17	2
相手が使っているため	34	24	4
親しい感じを出せるため	13	12	4
分からない	0	0	1
その他	1	1	0

大学友人への「ニセ方言」の使用理由としては、「相手が使っている」という回答が最も多く選ばれた。また、それと同時に、家族・地元友人の時と同様に「自然と出てしまう」という回答も多く見られた。「その他」の回答として、「アクセントにつられてしまう」という回答も見ることができた。

全体的に見ると、使用する理由として「自然と出てしまう」という回答が最も多かった。

これについては、後ほど考察をしたい。また、「その場の雰囲気に合わせてる」や「おもしろい感じを出せる」、「親しい感じを出せる」といった「方言コスプレ」の特徴に当てはまる回答も一定数見ることができた。

また、場面・相手別の使用率を見ると共に、Q.34では「会話・SNS・手紙の中で最も使いやすいと感じる場面」、Q.36では「家族・親しい地元友人・そこまで親しくない地元友人・親しい大学友人・そこまで親しくない大学友人の中で最も使いやすいと思う相手」を、それぞれ1つずつ回答してもらい、その上で自由記述式で理由も回答してもらった。Q.36において、相手を親密度によって5段階に分けた理由としては、三宅(2006)の述べた「親しさ志向」についても、調査を行いたいと思ったからである⁷。

最も使いやすいと感じる場面は、「会話」が49件(90.7%)と最も多く、次いで「SNS」が5件(9.3%)、「手紙」が0件(0%)となった。「会話」を選択した人の理由としては、「自然と出やすい」「無意識に出ている」「相手につられやすい」という旨の回答が一番多く、「面白さが最も出しやすい」といった「方言コスプレ」を連想させる回答もあった。また、「表現を間違えても、後に残ることがなく、その場限りで終わる」や、「SNSだと多数の人に見られるかもしれない、表現の誤りがこわい」という回答、「SNSだと考える時間は生まれやすく、ニセ方言を避けることになる」といった回答など、SNSの特徴を加味し、会話を選んだ人もいた。一方、SNSを選んだ人の理由としては、「イントネーションを気にしなくても良い」や「口にするのは違和感があるが、文字では違和感を感じない」といった回答を得ることができた。

【表7 「ニセ方言」を最も使いやすい場面】

回答	件数 (%)
会話	49件 (90.7%)
SNS	5件 (9.3%)
手紙	0

最も使いやすい相手は、「親しい大学友人」で40件(74.1%)であった、次いで、「親しい地元友人」が6件(11.1%)、「家族」「そこまで親しくない大学友人」が3件(5.6%)、「そこまで親しくない地元友人」が2件(3.7%)となった。親しい友人、特に「親しい大学友人」に回答が集中し、三宅(2006)の「親しさ志向」が改めて確認できる結果となった。「親密なやり取りを楽しみたいため」や「その人の方言がうつりやすいため」、「周りも色々な方言を話しており、ニセ方言を使うことに抵抗が無いから」などという回答が見られた。他に、「家族」と選択した人の理由では、「気分を害されても嫌われないから」という理由や、親しくない友人(地元友人、大学友人)を選択した理由としては、「距離を縮めたいから」「親しい大学友人だと誤りを指摘されるから」といった理由も見られた。

【表8 「ニセ方言」を最も使いやすい相手】

回答	件数 (%)
家族	3 (5.6%)
親しい地元友人	6 (11.1%)
そこまで親しくない地元友人	2 (3.7%)
親しい大学友人	40 (74.1%)
そこまで親しくない大学友人	3 (5.6%)

4.1.3 「ニセ方言」を使用しない理由

各項目 (Q7,10,13,16,19,22,25,28,31) において、「使わない」を選択した人が、理由としてどのような選択肢を選んだのかをまとめる。

まず、家族に対して「使わない」を選択した人は、以下の表9のように選択した。

【表9 家族への「ニセ方言」を使用しない理由】

回答 \ 場面 (選択人数)	会話 (24人)	SNS (35人)	手紙 (54人)
故郷の方言で話すため	14	18	11
違和感があるため	14	20	35
相手の気分を害するだろうと思うため	1	1	2
故郷以外の方言を知らないため	2	0	1
その方言が正しいものか分からないため	2	3	4
何となく嫌だから	4	6	8
分からない	2	5	7
その他	3	4	10

家族に対して「ニセ方言」を使用しない理由としては、「違和感があるため」がどの場面でも最も多かった。やはり昔から地元の方言で接してきた家族に対して「ニセ方言」を使うことに違和感を感じる人は多いようである。手紙については、「その他」の回答として、「文語を使う」という回答も目立った。

次に、地元友人に対して「使わない」を選択した人は、以下の表10のように選択した。

【表 10 地元友人への「ニセ方言」を使用しない理由】

回答 \ 場面 (選択人数)	会話 (16人)	SNS (21人)	手紙 (51人)
故郷の方言で話すため	9	10	11
違和感があるため	9	10	28
相手の気分を害するだろうと思うため	2	3	2
故郷以外の方言を知らないため	0	0	0
その方言が正しいものか分からないため	2	1	3
何となく嫌だから	5	7	8
分からない	2	2	10
その他	2	2	8

地元友人に対しては、やや回答が分かれた。「故郷の方言を話す」「違和感がある」という回答も多かったが、「何となく嫌だから」という回答も家族の時と比べると割合が高くなっている。

最後に、大学友人に対して「使わない」を選択した人は、以下の表 11 のように選択した。

【表 11 大学友人への「ニセ方言」を使用しない理由】

回答 \ 場面 (選択人数)	会話 (6人)	SNS (18人)	手紙 (47人)
故郷の方言で話すため	2	5	5
違和感があるため	4	11	26
相手の気分を害するだろうと思うため	1	1	1
故郷以外の方言を知らないため	1	1	1
その方言が正しいものか分からないため	0	1	2
何となく嫌だから	2	5	13
分からない	1	3	9
その他	1	2	8

大学友人に対しての回答は、家族・地元友人の時とは少し傾向が異なる。「違和感があるため」が最も多く選択されていることは共通しているが、他の対象と比べて、「故郷の方言で話すため」を選択した人の割合が少なくなっている。

4.1.4 補足項目

Q.38 では「異なる地域出身の友人から、自分の地域の方言を使われると、相手に対してどう思うか」について調査した。

【表 12 方言の受容意識について】

回答	件数 (%)
良く思う	9 (16.7%)
何も思わない	22 (40.7%)
嫌に思う	2 (3.7%)
明らかな間違いがあれば嫌に思う	15 (27.8%)
分からない	0
その他 (自由記述)	6 (11.1%)

「何も思わない」を選択した人が最も多かった。また、「嫌に思う」「明らかな間違いがあれば嫌に思う」を選択した人が全体の 30%以上を占め、相手に自分の地域の「ニセ方言」を使用されることに抵抗を示す人が一定数いることが明らかになった。一方で、「良く思う」と回答している人も存在し、三宅 (2006) が明らかにした「親しさ」を引き寄せる効果があるとも言えるだろう。その他の回答としては、「嫌とは思わないが、違和感を感じる」「可愛げを感じる」「指摘はするが、嫌には思わない」という回答があった。

4.2 個人インタビューについて

より詳しい「ニセ方言」の使用意識について調査するために個人インタビューを行った。調査に協力してくれた友人をそれぞれ友人 U、友人 T とする。筆者と友人 U、友人 T は同じ学部に所属しており、普段から交流することがある。また、3人には共通の友人として、静岡出身で遠州弁を話す友人 M が存在する。調査の概要は、「3. 調査方法」で述べたとおりである。2人には、家族や地元の友人、大学での友人を思い浮かべてもらい、それぞれについてどのような言語を使用しているかを尋ねた。

4.2.1 友人 U について

友人 U は調査時 22 歳男性で、居住歴は 0～18 歳香川県丸亀市、18～22 歳広島県東広島市である。現在は 1 人暮らしをしている。家族構成は、母、父、3つ下の弟の 4 人家族であり、全員香川県出身である。友人 U の言語使用意識調査の結果は表 12 の通りである。

【表 12 友人 U の言語使用意識】

記号	相手の分類	相手の属性（出身/使用言語）	U が使うことば
A	家族	香川県/讃岐弁	讃岐弁
B	地元友人	香川県/讃岐弁	讃岐弁
C	地元友人	香川県/関西弁	讃岐弁+関西弁
D	大学友人	静岡県/遠州弁	讃岐弁+遠州弁+広島弁
E	大学友人	広島県/広島弁	讃岐弁+広島弁+遠州弁

友人 U は基本的に故郷の方言である讃岐弁を使いつつも、相手を使うことばに合わせて自分の使うことばを変えていることが分かった。そのため、C・D・E の場面のように、関西弁や遠州弁、広島弁など「ニセ方言」を使っている実態がある。これらの場面について、その使用の意識についても質問を投げかけた。

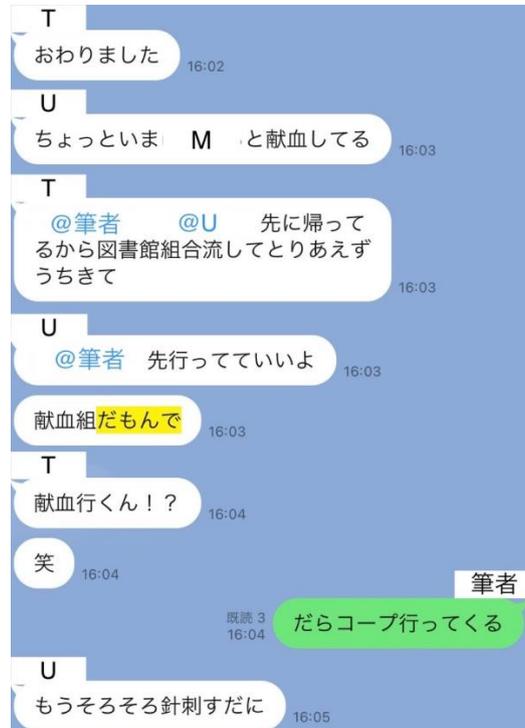
まず C の場面では、香川県の地元の友人との会話であるが、友人は関西の大学に通っているために、最近は関西弁で話している。U もその友人に合わせて、関西弁を使うことがあるとのことだ。例えば、その友人と話す際に「～してはる」といった言葉を使うことがあると言っていたが、他の場面では使うことはないという。その使用意図について尋ねたが、U によると「使用する際に考えていることは特にない」とのことであった。しかし、同時に「相手と話を合わせる感覚と同じ」「自分も相手もしゃべりやすくなる」という「ニセ方言」に対する意識については聞くことができた。また、「関西弁を使ってみたい」という思いや、「関西弁を話す自分を客観視すると面白いと感じる」という感覚も聞き出すことができた。このような意識を持っていたからこそ、「ニセ方言」を使用することに違和感はないのかもしれない。

次に D・E の場面であるが、注目すべき場面である。この場面では、U が「ニセ方言」を積極的に使用する様子が見られる。筆者や U、T の間には、遠州弁を話す共通の M がいるのだが、U はその影響から遠州弁を使うことが多い。遠州弁を話す M の前で使うのはもちろんだが、M がいない場で使うことがある。このことについては U も自覚しているようで、インタビューでは「どちらかというと遠州弁を意識的に使うことがある」という意見を聞いた。また、M に対して使う場合、「親しさ」を示したいという使用意図もあるようである。一方、M がいない場で使う場合は、内輪ノリのように使うと述べていた。さらに、遠州弁の「ニセ方言」自体が、遠州弁を話す M のことを指すように代名詞のような使い方をすることも確認できた。このことについても U は、M や遠州弁を馬鹿にするような目的は一切なく、内輪ノリであるとも述べていた。

また、U は広島弁を使うこともまれにある。広島弁については「使う時は必ず意識的である」と述べていた。その意図としては、「広島に住んでいるため広島の当たり前のおきたい」、「広島出身の友人に親しさを示したい」というものがあるようだ。実際には、「じ

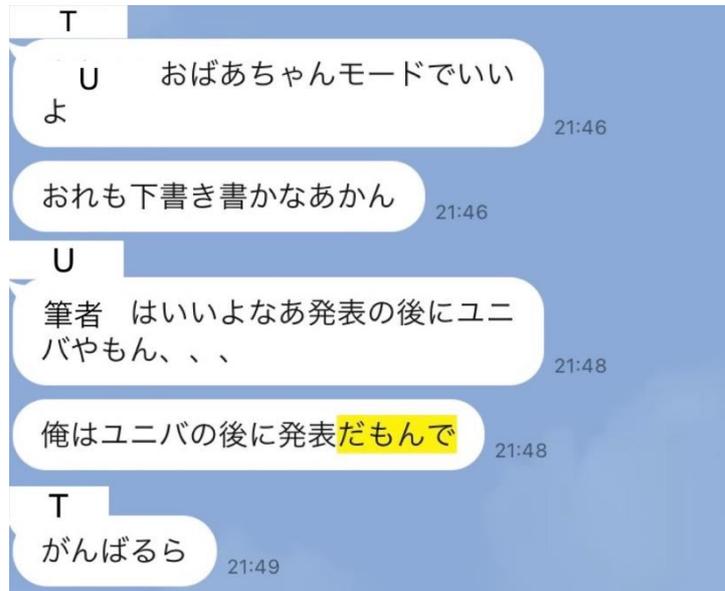
ゃけえ」や「たわん」(広島弁で「届かない」という意味)という言葉を使ったことがあるという。

例1 Uと筆者とTとの会話(Mが一緒)



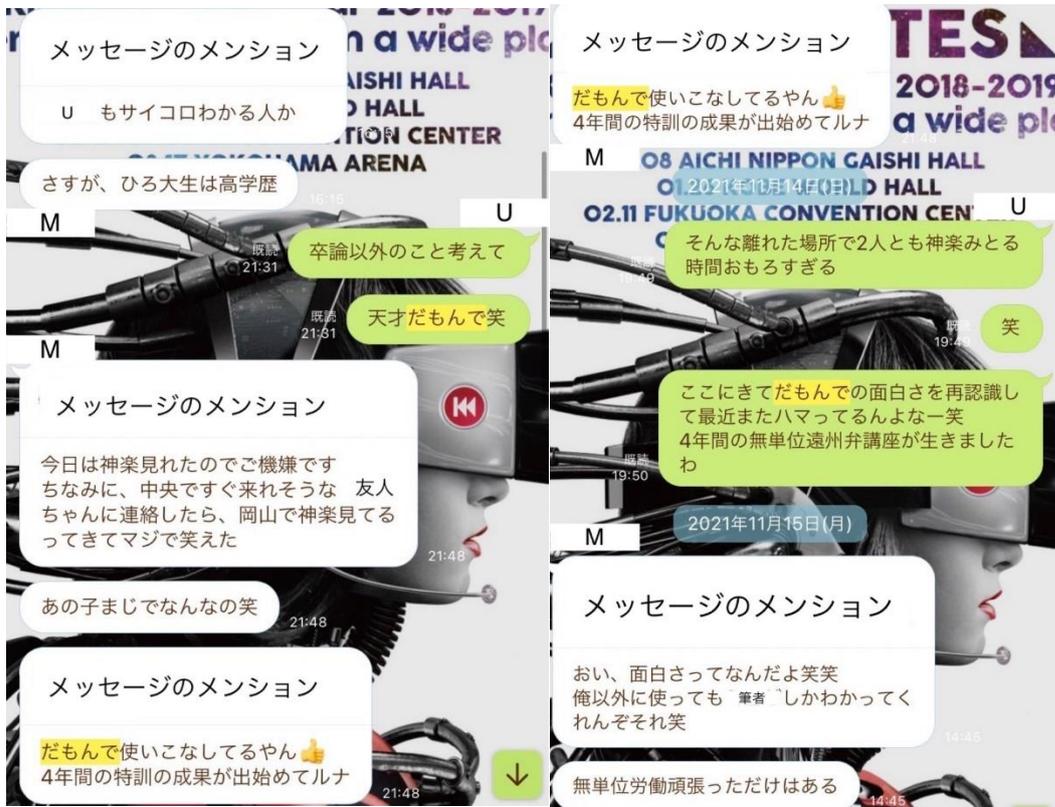
例1は、Uが筆者とTが入っているLINEグループで遠州弁の「ニセ方言」を使用している場面である。それぞれの大学の授業が終わった後の会話であり、筆者とUとTは授業後に合流することになっている。Tが授業が終わったことを知らせると、UはMと一緒に献血に行っていることを伝えている。その後Tがメッセージを送り、それを受けてUが「先行っていいよ」「献血組だもんで」と送っている。さらにそれを受けて、筆者は「だらコープ行ってくる」と返し、Uは再度「もうそろそろ針刺すだに」と「ニセ方言」を使用して発言している。「だもんで」「だら」「だに」という言葉は、Mが日頃よく話す遠州弁である。このLINEグループ自体にはMは入っておらず、会話を見ることはないが、UがMとリアルと一緒にいるために、「ニセ方言」が発動された可能性が考えられる。

例2 UとTの会話 (Mはその場にいない)



例2は、例1と同じLINEグループにおいて、UとTが会話している場面である。筆者とUとTで遊園地に行くことになっているのだが、その直後にゼミ発表が控えており憂鬱だと言うUに対して、Tが「おばあちゃんモードでいいよ」と発言している⁸。それを受けてUは、遊園地に行くよりも前に発表がある筆者に対して羨ましさを示しつつ、「俺はユニバの後に発表だもんで」と述べている。この場面では、リアルでMと一緒にいる訳でもないため、「だもんで」という遠州弁が突然現れることは不自然である。しかし私たちの中での言語使用の実態として、このように会話の中で突然遠州弁のような「ニセ方言」が使われることが割とある。

例3 UとMの会話（左→右）



例3は、UとMの個人LINEでの会話である。MがUに対して、高学歴で頭が偉いと褒めるような発言をすると、Uはその返しとして「天才だもんで」と送っている。それに対してMは、「だもんで使いこなしてるやん」と指摘し、加えてUが約4年間の付き合いの中で遠州弁を習得したことを「特訓の成果」と表現し、好意的に返信をしている。また、その後のUの「だもんでの面白さを再認識して最近またハマってる」という発言からは、遠州弁を「おもちゃ」のように面白いものと捉えていることが分かる。

以上の3つの例やインタビューの結果から、Uの言語使用について以下のようにまとめる。

- 讃岐弁を会話の基本とする
- 相手が使う言語によって「ニセ方言」を使い分けることがある
- 相手がその方言話者であるかどうかに関わらず、内輪ノリで「ニセ方言」を使うことがある

4.2.2 友人Tについて

友人Tは調査時22歳男性で、居住歴は0～18歳愛媛県愛媛市、18～22歳広島県東広島

市である。現在は1人暮らしをしている。家族は母のみで母子家庭であり、母も愛媛県出身である。Tの言語使用意識調査の結果は表13の通りである。

【表13 知人Tの言語使用意識】

記号	相手の分類	相手の属性（出身/使用言語）	Tが使うことば
a	家族	愛媛県/伊予弁	伊予弁+関西弁
b	地元友人	愛媛県/伊予弁	伊予弁+関西弁
c	大学友人	静岡県/遠州弁	伊予弁+関西弁※
d	大学友人	広島県/広島弁	伊予弁+関西弁※

※普段は「伊予弁+関西弁」だが、特殊な場合のみ他の「ニセ方言」を使うとのこと

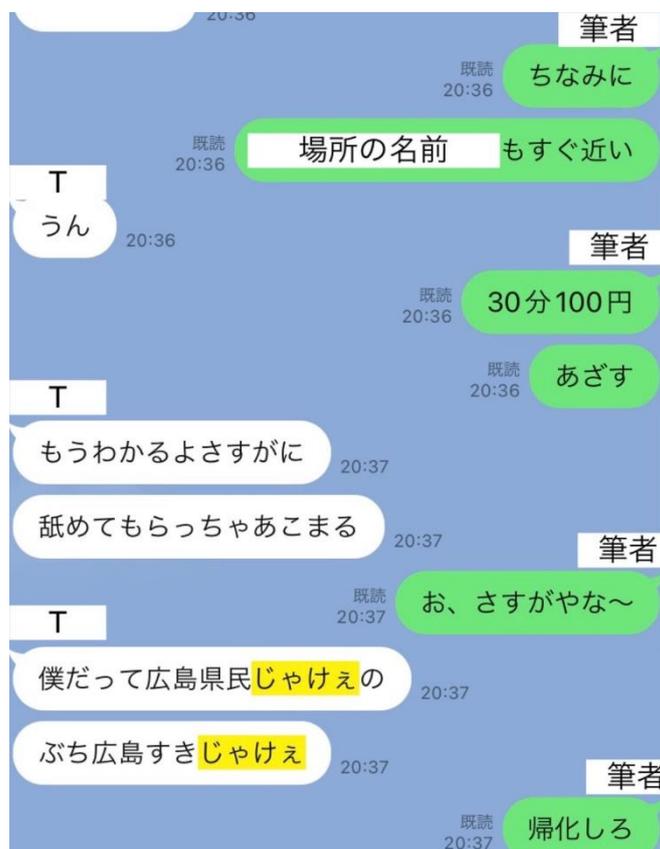
Tの言語使用意識は、「伊予弁+関西弁」が基本となるようであった。彼は愛媛県出身のため、関西弁は「ニセ方言」扱いとなる。ただ、関西弁と伊予弁は似ているところもあるため、本人は「ニセ方言」を使っている意識もなく、「違和感なく自然と出る」と述べる。また、関西弁を使うようになったきっかけも特になく「気づいたら使っていた」とのことだ。そのため「伊予弁+関西弁」がTの言語スタイルとして確立されていると言えそうだ。一方、遠州弁や広島弁のような「ニセ方言」は意識をしないと使わないため、特殊な場合は除いて、普段は出ることはないようだ。

aとbの場面では、相手が地元愛媛出身の方であるため、「伊予弁+関西弁」という基本の型から外れることはない。家族に対しては「友人と話す感覚と同じ」という意識を聞くことができた。相手によって自身のスタイルは変化しないようである。また、対話であってもLINEであっても、使用意識は変わらないようであった。

cとdの場面では、相手は大学友人であり、静岡県や広島県などTとは異なる地域の出身である。その場合でも、Tは伊予弁と関西弁を使うようである。しかし、時に「ニセ方言」を使うとのことで、その時のLINEの文面を調査した。

まず、上に挙げた例2を見ると、Tが「俺も下書き書かなあかん」と関西弁を自然と使っていることが見て取れる。注目すべきはその後で、Uが「俺はユニバの後に発表だもんで」と遠州弁の「ニセ方言」を使った直後に、Tは「がんばるら」と遠州弁を使って返している。このことについてTは「意識して使ったはず」と述べている。この場面では、「だもんで」という言葉が遠州弁であるということをお互いに認識しており、その上で「～（だ）ら」と返すことで、コミュニケーションを楽しんでいるのかもしれない。

例4 Tと筆者の会話



例4は、Tと筆者が広島市内に行く際の会話である。広島出身である筆者がTに対して、広島市内のことを説明しているのだが、そのことに対してTは「もうわかるよさすがに」と送り、広島に慣れていることをアピールしている。筆者がそのことを褒めるように反応した後、「僕だって広島県民じゃけえの」「ぶち広島すきじゃけえ」と「ニセ方言」を用いて発言している。この場面では、「ニセ方言」の意識的な使用が顕著に表れている。自分が広島県民と同じくらい広島のことを知っていると伝えるにあたって、広島県民が普段使う広島弁を使うことで、より強いアピールになる効果があるように見える。

以上の用例やインタビューの結果から、Tの言語使用について以下のようにまとめる。

- 「伊予弁+関西弁」を会話の基本とし、「ニセ方言」となる関西弁を日常的に使う
- 特定の場面においては、遠州弁や広島弁のような「ニセ方言」を使う

5. 検討・考察

調査結果を踏まえ、検討・考察を進めていく。

従来「ニセ方言」については、田中ゆかり氏が注目し「方言コスプレ」という言葉で「ニ

セ方言」が持つ効果について説明をしてきた。これは、本稿で既に述べた通り、その場に合ったキャラクター・雰囲気・内容を演出することができるという効果である。本稿のアンケート調査においては、「ニセ方言」を使用する理由として、「おもしろい感じを出せるため」「その場の雰囲気に合わせるため」という「方言コスプレ」を想定した回答が一定数選ばれていた。しかし、本稿のインタビュー調査においては、何かキャラクターや雰囲気を演出しようという使用意識は見られず「方言コスプレ」と説明できないと考えられる用例も存在した。アンケート調査では見えなかった現代の若者の「ニセ方言」使用の実態を、インタビュー調査で用例を見ることで明らかにできたと考え、インタビュー調査を主に考察していく。

5.1. 「ニセ方言」が使われる場面

まず、「ニセ方言」が使用された場面について考察する。アンケート調査における相手・場面別の使用率（表3）やU・Tの使用言語意識を見ると、従来の研究が示す通り、相手によって使用言語を切り替えているようである（状況的コードスイッチング⁹⁾。その中でも、「ニセ方言」は大学の親しい友人に対して使うことが多いことが分かっている。UやTも例外ではなく、大学の親しい友人グループの中で「ニセ方言」を使用することが多い。つまり、2人にとって「ニセ方言」は親しい友人モードの使用言語として発動されるものである。では、そのグループ内では、どのような場面で「ニセ方言」が使用されているのであろうか。

例1、例3のような場面でUが遠州弁を使う際には、少なからずMが関係してきた。例1では、UがMとリアルで共に行動している。そのことが筆者やTに共有されたことで（もしくはそれと同時に）、遠州弁を発動させることが可能となったと考える。筆者やU、Tの間で「Mといえば静岡出身で遠州弁を使う」という共通の意識が存在しているということが前提条件となるが、Mが話題に出たから遠州弁を使用するという妥当な因果関係が生まれている。つまり、Mが話題に出たことによるその場の内容や雰囲気に沿って、遠州弁を発動したと考えることができるだろう。また、Uに対する応答の中にも「ニセ方言」が見られることから、一方的ではなく双方向的に「ニセ方言」でのコミュニケーションを楽しんでいることが分かる。

例3では、静岡出身のMが直接の会話の相手であることによって、遠州弁を発動できる環境が担保されていると考えられる。相手を模倣する「ミラーリング」は心理学の分野で研究されており、相手との距離を縮めるためのコミュニケーション手段の1つとして重宝されている。この場面ではMが使う遠州弁をUも同様に使うことで、親密なコミュニケーションを生み出している。また、例4で、Tが筆者に対して広島弁を使っていることも、「ミラーリング」が働いていると考えられる。しかし、例3と異なり例4は、話題として“広島県民なら知っている”内容が含まれており、その内容に合わせて広島弁を発動しているとも考えられる¹⁰⁾。

例1、例3とは異なり、Mとの関連性を持たない状態でUが遠州弁を使用しているのは

例2の場面である。LINEの会話内容でMが話題となっていないこと、UがMとリアルで共に行動していないことは、調査・インタビューで明らかになっている。Uの基本使用言語は讃岐弁であるため、この場面で遠州弁が使われることは不自然ととれる。しかし既に上で述べたように、私たちの中での言語使用の実態として、このように会話の中で突然遠州弁のような「ニセ方言」が使われることは時々ある。とすれば、環境や会話内容にきっかけが無くとも、「ニセ方言」は発動可能であるのかもしれない。

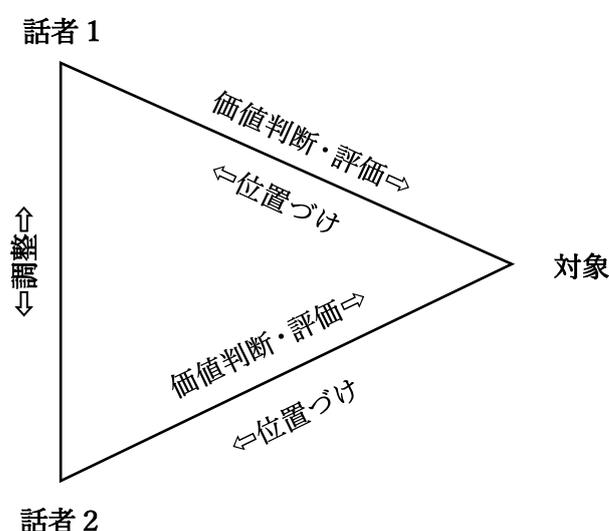
これらのことを踏まえて考えると、「ニセ方言」が使用される場面としては、田中(2007)の研究で示されたようにキャラクターを発動したい場面に加えて、対象となる方言を話す人物が話題に出る時、またその人物と話す時はもちろん、その人物が所属するグループ内における全ての会話において使用できるという可能性を提示する。これらの場面で大切なのは、そのグループ内において、「ニセ方言」は私たちの一種のスタンスを示すものであるという意識が潜在的であれ存在していることであると考えられる。スタンスと方言の関わり方については、太田(2019)が、『あまちゃん』が代表されるテレビドラマの中での方言について、登場人物たちのコードの選択と切り替えを調査する中で、「スタンス取り」という概念を用い、登場人物たちの言語使用について説明を試みている。太田による「スタンス取り」については以下の通りである。

われわれにはいろいろな手持ちのことば(言語資源)がある。それは生育地の方言や標準語だけではなく、自分とは社会的に直接関連のない集団や時代のものも含まれる。われわれはそのようなことばの要素をうまく組み合わせ、ある種の「行為」や「活動」をおこなっている。その行為や活動をおこなうときに、その人(独特)のある話し方(スタイル)が意図的、非意図的に関わらず生じる。また、そのようなスタイルを作ることが、われわれが相互行為においてその話題や相手との関係でどのような立ち位置にいるのか、すなわちどのようなスタンスを取っているのかを表すことになる。(太田2019)

太田によれば、「ニセ方言」でさえも手持ちの言語資源となり、意図的、非意図的に関わらず生じるその人のスタイルが、相互行為においてどのようなスタンスを取っているのかを表すという。UやT、筆者もまた、「ニセ方言」を自分の手持ちのことばとし、場面によって隠喩的コードスイッチング¹¹を行い、それらを意図的、非意図的に発動することでスタンスを示していると考えられる。本稿のアンケート調査において、「ニセ方言」の使用意識として「自然と出てしまう」が最も多く回答されていたが、自身のコードスイッチングに沿って、非意図的に言語の切り替えを行っていたと考えられる。そして結果的に、話題や相手との関係性を示していたのではないだろうか。太田の研究は、テレビドラマの『あまちゃん』という作品における「ニセ方言」を取り扱ったもので、その登場人物たちは標準語と東北方言による切り替えを行っていた。ただ、本稿の研究は、実際の若者が使用する「ニセ方言」

に焦点を当てたもので、生育地方言と「ニセ方言」での切り替えを行っているため、新たな視点からの考察となるだろう。

そもそも「スタンス」とは、Du Bois (2007) によって、ある主体による対象の評価、対象に対する主体（自分もしくは他者）の位置づけ、他の主体に対する調整（位置づけ）を同時に対話的に行うことだと定義されている。（図1）我々は対象（話の内容）を介して、相手との関係性を調整するのだが、太田が「スタンス取りに関わるのは話の内容だけではない。どのコード、どの形式を使うかによっても対象との関係、さらには相手との関係が調整され、自身のスタンスが決まる。」と述べるように、言語選択もスタンスを示すことに繋がるのである。「ニセ方言」の使用が私たちのスタンスを示す場合があると言えるだろう。



【図1 DuBoisのスタンス】

例えば、例1や例4のような場面であれば、Uが遠州弁を、Tが広島弁を使うことで対象（話の内容）との位置づけが決まる。例1ではUが「献血にはMと行くのだ」ということ、例4ではTが「広島県民と同じほど広島に詳しい」ということが明確に示されると考える。また、例2や例3では、Uが遠州弁を使うことで会話相手との位置づけが決まる。「親密コード」のように扱われる「ニセ方言」は、「あなたと私は親しい」「私たちは親しい」ということを示すことができるだろう¹²。これらのスタンスが示すものは、Mとの物理的な近さであったり（例1）、Mやグループとの「親しさ」という心理的な近さ（例2・例3）、広島との密着度（例4）であったりと様々である。その場でのスタンスを示す際の選択肢の一つとして、「ニセ方言」は使用されるのである。

加えて、応答のコミュニケーションにおける「ニセ方言」については、相手のスタンスへの同調・理解という役割を持つだろう。本調査でも、グループ内の誰かが「ニセ方言」を使うと、その返答には「ニセ方言」を使用する例が見られている。例えば、例1では、Uが遠

州弁を使うことで「献血にはMと行くのだ」というスタンスを示すと、筆者は同じく遠州弁を使って「だらコープ行ってくる」と返答している。この「だら」には、Uのスタンスを了承する意味合いが入っていると考えられる。また、「だら」は本来語尾に付き「だよね」という意味を持つのだが、筆者は文頭に使用しておりその正確性については特に気にせず、同じ言語体系を使うことが優先されていることが分かる。

なお、今回の調査は、首都圏の大学に通う大学生を調査対象とした田中（2007）や三宅（2017）の研究とは異なり、様々な地域出身の人が集まり、かつ方言が主流な地方の大学に通う大学生を調査対象としている。そのため、対象となる学生は首都圏学生よりも方言に対しての親しみや慣れがあると考えられる。その分「ニセ方言」も取り入れやすいのかもしれない。

5.2 「ニセ方言」の効果

5.1も踏まえ、「ニセ方言」の効果について改めて明らかにしておきたい。「ニセ方言」を使用する理由としてUはインタビューで「内輪ノリ」と回答しているが、これは「ニセ方言」を発動することでグループにある共通認識を想起させ、場を盛り上げることができる効果があると解釈できるだろう。小林（2004）は、方言の現代的機能は「発話内容の伝達」から「相手の確認と発話態度の表明」へと変化しつつあると述べた。「相手の確認」とは、同一社会に帰属する親しい仲間同士であることの確認ということであるが、UやTが使用する場面でも同様の機能が働いているのだろう。同様に、会話内容（話題）に対しての「態度の表明」という機能を持つことも明らかになった。そしてそれらは、前述したとおり「スタンス」の一種である。しかし、小林が主に生育地方言と共通語を対象に言及しているのに対して、本稿では「ニセ方言」を扱っているという違いがある。同じ地域出身の者たちが、同一社会（出身地域）の仲間同士での親しさの確認に「生育地方言」を使う一方、異なる地域出身の者たちが、同一社会（同じ学部内の特定のグループ）の仲間同士の親しさの確認に「ニセ方言」を使うことがあるということを明白に示すことができたのではないか。

また、例3で見えた「ニセ方言」に「ハマって」いるというUの発言は非常に興味深いものである。ここからは、Uが「ニセ方言」＝「面白いもの」と捉えており、方言を「おもちゃ」のように使う感覚が読み取れる。Uにこの意識が芽生えた背景については明確には分からない。だが、Uが「関西弁を使ってみたい」と思うことと同じように、特徴的な言葉や新たに覚えた言葉を使いたいという意識はあるのかもしれない。「ニセ方言」に対して娯楽的な要素を見出していることは確かであり、この発言からは若者の言語使用の一端が垣間見えた。受け手であるMもそのことを好意的に受け入れており、三宅（2017）がLINEの方言は「場の関係性の構築・保持・深化に利用されている」と述べているように、「面白い」ものと捉えられる「ニセ方言」は、場の関係性の深化という効果を持つようだ。改めて「親しさ」を繋げる役割が「ニセ方言」にも備わっていることが分かる。

しかし注意すべきことは、「ニセ方言」は必ずしも好意的に受け入れられるものではない

ということだ。本稿のアンケート調査 Q.38 の結果が示すように（表 12）、「ニセ方言」に抵抗を示す人も一定数いる。「親しさ」を引き寄せたいという「ニセ方言」の話し手がいる一方、好意的に思わない受け手が存在することは、心得ておくべきことだろう。

「ニセ方言」を楽しんで使う人がいる一方で、「ニセ方言」自体を自分の方言のように使う人がいることも明らかになった。T は、基本の話し方として「伊予弁+関西弁」であるという意識をインタビューで明かしている。同時に、T は使用言語について「自分が最も話しやすい言葉を誰にでも使う」と語っており、関西弁を自分が話しやすいものと認識していることが分かる。また、LINE の調査においても、T が「下書き書かなあかん」と関西弁を実際に使用していることが結果として出ている。T は関西弁を、地元の方言と同じように捉えているようだ。関西域外における関西方言については、三宅（2005）が方言の好悪の相関を調査し、「関西方言は、東京の言葉と対抗すると同時に、地元方言に近いものとして捉えられていると言えそうだ」と述べているように、地元の方言と同じように捉え使用する例は今までも多く見られていた。そのため、T もこれらの例に当てはまるものとする。だが、T がいつ関西弁に触れ、どのように生育地方言と同じレベルの使用言語として会得したのかについては今後考え、その背景を明らかにする必要はありそうだ。

6. おわりに

本稿においては、筆者自身の言語使用における気づきに基づく問題提起を行い、若者の「ニセ方言」使用の実態を明らかにすることを目的とした。その上で、「ニセ方言」の使用実態・意識を調査するアンケート調査や、個人に焦点を当て「ニセ方言」の使用意識を調査するインタビューなどを行った。結果として、「ニセ方言」は首都圏だけでなく方言主流社会においても使用されることが明らかとなり、その使用意識についての考察を行った。「ニセ方言」の使用意識については、「方言コスプレ」が研究の中心となっていたが、本稿では「方言コスプレ」とは考えにくい用例を取り扱いつつ考察を行ったため、新たな視点からも論じることができた。そのため、地方の若者の「ニセ方言」使用について考えるための資料は、提供できたのではないかと考える。

本稿の大きな主張は、「ニセ方言」の使用がスタンスを示す役割を持つというものである。本調査では、従来の「ニセ方言」調査では見られなかったより自由な使用例が見られ、幅広い場面において「ニセ方言」が使用されていたが、どの場面でも会話内容や会話の相手との関係性を調整する役割を見出せた。その効果としては、「親しさ」を確認するものが大きく、関係性の深化を促進することがあるようだ。「ニセ方言」は、使用される場面が相手や媒体（会話・SNS など）によって決まるだけでなく、スタンスの提示をしたい時こそその真価を発揮するのである。

スマートフォンのように常に持ち歩くことができ、インターネットや SNS を利用することができるようになった私たちは、非生育地方言と触れ合う機会も多くなった。さらに、多

くの地域から若者が集まる大学という環境ではなおさらである。その中で、意識せず「ニセ方言」を使用する若者も増えている。本調査でも、「ニセ方言」の積極的な使用と共に、無意識的な使用が行われていることが明らかになっている。現代では「ニセ方言」を「コスプレ」のように使用するだけでなく、生育地方言と似たように使用するなど慣用化が進んでいるのかもしれない。

【参考文献】

- ・宇田萌美「母方言・移住先方言・標準語のスタイルシフトの実態」(『阪大社会言語学研究ノート』第15巻、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室、2017年11月、1-21頁)
- ・太田一郎「メディアの中の方言：テレビドラマのコードスイッチング」(『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』第86巻、鹿児島大学、2019年3月、21-38頁)
- ・大西拓一郎『シリーズ〈現代日本語の世界〉6 現代方言の世界』(朝倉書店、2008年8月)
- ・小林隆「アクセサリとしての現代方言」(『社会言語科学』第7巻第1号、2004年9月、105-107頁)
- ・小林隆「現代文学の文語化傾向」(『学燈』第109巻第3号、2012年、18-21頁)
- ・柴田武『日本の方言』(岩波新書、1958年4月)
- ・田中ゆかり「『方言コスプレ』にみる「方言おもちゃ化」の時代」(『文学』第8巻第6号、岩波書店、2007年8月、123-133頁)
- ・田中ゆかり『『方言コスプレ』の時代—ニセ関西弁から龍馬語まで』(岩波書店、2011年9月)
- ・田中ゆかり「『方言コスプレ』とその背景」(『学燈』第109巻第3号、2012年、22-25頁)
- ・田中ゆかり『方言萌え!?—ヴァーチャル方言を読み解く』(岩波書店、2016年12月)
- ・田中ゆかり「全国2万人webアンケート調査に基づく方言・共通語意識の最新動向」(『語文』第158号、日本大学国文学会、2017年6月、310-344頁)
- ・木部暢子ほか編『方言学入門』(三省堂、2013年9月)
- ・三宅和子「携帯メールに現れる方言—「親しき志向」をキーワードに」(『日本語学』1月号、第25巻第1号、明治書院、2006年1月、18-31頁)
- ・三宅和子「SNSにおける方言使用の実態—エセ方言はいつ、誰に使うのか—」(『文学論藻』第92巻、東洋大学文学部日本文学文化学科、2018年2月、42-62頁)
- ・三宅和子「第14章 LINEの中の「方言」—場と関係性を醸成する言語資源」(小林隆編『コミュニケーションの方言学』ひつじ書房、2018年5月、319-337頁)
- ・三宅直子「関西域外における関西方言の受容について—好悪評価コメントより—」(陣内正敬・友定賢治編『関西方言の広がりコミュニケーションの行方』和泉書院、2005年12月、267-278頁)

・吉里さち子「熊本市における地域共通語話者の発話に現れるコードスイッチング—家族-友人間に着目して—」(『熊本県立大学大学院文学研究科論集』第11号、熊本県立大学大学院文学研究科、2018年9月、71-84頁)

・Du Bois, John W. (2007). The stance triangle. In Robert Englebretson (ed), *Stance taking in discourse: Subjectivity evaluation interaction*, 139-182. John Benjamins.

【注】

¹ 田中(2007)は「方言コスプレ」が前景化した背景として2つの要因を指摘している。1つ目は、インターネットなどの普及により「打ちことば」が日常化し、非対面・非同期という特性から「自己装い表現」の一般化が進んだことである。2つ目は、方言の「おもちゃ化」の時代を迎えていることである。

² 「本方言」「ジモ方言」「ニセ方言」とは田中(2007)による造語である。「本方言」は生育地方言のことを指し、生育する過程で自然と身についたものである。「ジモ方言」とは、生育地の方言ではあるものの、その人自身は使用しないものである。例えば、両親や祖父母世代の使用方言として見聞きするようなものである。

³ 「エセ方言」は「ニセ方言」と同義である。

⁴ 三宅(2018)の調査では、首都圏の大学に通う大学生が対象となっている。調査の中で、「SNSでエセ方言をその方言出身者にも使うか」という問いには、37人中14人が「はい」と回答し、その理由として「無意識に使っている」を選択した人は7人いた。

⁵ アンケート調査にあたって、次の前提を共有した上で回答を求めた。

「方言」の定義としては「その特定の地域で使われる日本語の変種」とする。なお、文末表現(「～じゃけん」など)、定型表現(「なんでやねん」など)、イントネーションの表現なども全て含むものとする。

また、「ニセ方言」とは、非生育地方言(故郷の方言ではない方言)のことを指す。例えば、広島を故郷とする人が使う「なんでやねん」(関西弁)や、「～だら」(静岡の方言)は「ニセ方言」の一種である。

⁶ 三宅(2018)は、LINEチャットの特徴として、「現実の空間でできた人間関係のつながりを仮想空間の中で保持し、会話を楽しむ娯楽性の強いコミュニケーションである」ことを挙げている

⁷ 三宅(2018)は調査において、「エセ方言」を使用する相手の選択肢として友人を「同郷の親しい友人」「同郷のあまり親しくない友人」「異郷の親しい友人」「異郷のあまり親しくない友人」の4つに分類し、「親しさ」がどのように影響するのかを明らかにしようとした。

⁸ 「おばあちゃんモード」とはTの造語であり、明確な意味は持たない。ただこの場面では、「ゆっくり準備すること」を意味すると考えられる。

⁹ コードスイッチングとは、二種以上の異なる言語体系の中で使用言語切り替えのことを

指す。その中でも、状況的コードスイッチングとは、場面や相手によって切り替えを行うことを言う。本稿では、生育地方言と「ニセ方言」（関西弁や遠州弁、広島弁など）という言語の切り替えを行っていると考ええる。

¹⁰ この場面では、“怖いキャラ”のような広島弁が持つイメージが発動されるのではない。

¹¹ 隠喩的コードスイッチングとは、会話の中で特別な意味やニュアンスを含ませるために使用言語の切り替えを行うことである。

¹² 三宅（2018）の SNS における「エセ方言」の調査によって「方言、エセ方言ともに、親しい人に多く使われており、親しい人間関係を保持したり促進したりする役割を担っている」ことが明らかになっている。

【謝辞】

本調査にあたり、友人 U・友人 T を始め、ご協力を頂いた皆様に深く感謝を申し上げます。